

イブン・ブトゥラーン『医師たちの宴会』

—解題・翻訳・注釈—

岡 崎 桂 二

1. 初めに

本稿で訳出する『医師達の宴会 (Risāla Da'wa al-Aṭibbā')』は、バグダード生まれでネストリウス派の僧であり医師でもあったイブン・ブトゥラーン (1066年没) が、1058年／イスラーム暦450年にマイヤーファールキーンのアミール (Naṣr al-Daula Abū Naṣr Ahmad) に献呈した作品で、現在までに4種の写本が残されている。刊本としては1901年にアレクサンドリア、次いで1920年にカイロで出版されているが、後者は前者の再版であり、校訂の不完全なものであった。しかし、1984年にKlein-Frankeによるドイツ語訳、さらに翌年、同氏の校訂本が出るに及んで、この作品への理解や評価の道が広く開かれることになった¹⁾。だが、わが国においては今日に到るまで未紹介の作品であり、ここに不十分ながら訳出するものである。

『医師達の宴会』はフィクション性を露にしている点で、古典アラブ文学において稀有な作品で、通常、マカーマート・ジャンルに属するものと見なされている。そして後述のように、その成立年代、形式、内容、文体、等の各面から見て、ハマザーニー (1008年没) とハリーリー (1122年没) とを繋ぐ作品の一つと考えられており、不明な点が多いマカーマート成立史の核を握る作品の一つであると評価されている²⁾。

また長老医者と偽医者 of 医学問答というユニークな内容から、そこで開陳される内科、外科、眼科、瀉血、薬学、に関わる論議は、当時のイスラーム世界の医学の水準を示すものとして、医学史上の重要性を有している。さらに、後述のように、イブン・ブトゥラーンは医学の理論家、臨床医としての経験を基にして著した『養生表 (Taqwīm al-Ṣihha)』の作成者としても名高く、そのヨーロッパ各国語版は様々に変形されてキリスト教世界の養生法とその思想に影響を与えた。イブン・ブトゥラーンは該博な医学知識をこの『医師達の宴会』に鏤めており、その意味においてアラビア医学史の貴重な史料となっている³⁾。

さらに、策を弄し、コトバ巧みに食事にありつこうとするトゥファイリー (ṭufaylī) と称される「押しかけ食客」と「吝嗇家 (bakhīl)」のテーマは、アラブ文学のトポスとなっており、当時の社会情勢を示す格好の史料となっている⁴⁾。さらに、主客の攻防中に食卓に供されるマディーラ (madīra) という天下の珍味とされる肉料理は、ハマザーニー作品中 (第22話) の主要テーマでもあり、この面でも社会的、文化的背景のつながりとして注目されている⁵⁾。

このように、校訂者Klein-Frankeが記すように、『医師達の宴会』はアラブ文学のみならず、アラビア医学、イスラーム社会・文化の各面において重要性を有し、貴重な史料となっている⁶⁾。訳出に当たって当該書の理解に資すために、時代背景、医学的、文学的意義を概観する。

(以降、『医師達の宴会』を『宴会』と略記する)。

2. イブン・ブトゥラーンとその時代

Abū al-Ḥasan al-Mukhtār al-Ḥasan b. ‘Abdūn b. Buṭlānは、推定1000年ごろにバグダードで生を受け、Johannesという洗礼名を持つネストリウス派のキリスト教徒として当地で育った⁷⁾。若年より医学を志し、多くの指導者の下で学業に励んだが、わけてもキリスト教の司祭を務め、高名な医師でありまた哲学者でもあったIbn al-Tayyibに師事したことが知られている。

バグダードで開業医として活躍した後、1048年に生地を離れてアレppoに赴き、その後、アンティオキア、ヤッファを経由して、翌年カイロに着いた。彼の著作によってこの旅行の詳細を知ることができる。それに拠ると、この旅行の最大の目的は、カイロの医師団長であるIbn Ridwānとの知誼を得ることであった。

当時、エジプトはファティマ朝(909年～1171年)のカリフ、アル＝ムスタンスィル(在位1036年～1094年)が治めるところであり、このカリフは非ムスリムの医者たちを重用していたと言われる⁸⁾。

しかし、イブン・ブトゥラーンの到着時、カイロの医学界は捐介な性格で知られるイブン・リドワーンが牛耳っており、イブン・ブトゥラーンはこの医師団長との論戦に引きずり込まされ、必然的に所期の目的である、カイロでの医師職獲得の夢を絶たれた。

この二人の医師がなぜ論戦を交わすようになったかの詳細は不明であるが、両者は古代ギリシャ以来の奇妙な問いである「鶏の雛と他の雛鳥の何れの体温が高いか」をテーマとする議論(muwāzana)を戦わせた⁹⁾。この論戦の背後には、イブン・リドワーンの傲岸不遜な態度をめぐる確執や、自己の権益擁護のために新参者を排除しようとする意図、という個人的な事情があったが、その本質は、師について学び、師の学説を祖述するという方法と、独学で読書を通して学を深めようという二人の学問修得方法の相違が大きく横たわっていた。言わば伝統的な口承と革新的な書承という態度、学的信念の違いが両者間にはあったのだ。故郷のバグダードで高名な哲学者であり医家でもあったイブン・アッタイブから直接学んだイブン・ブトゥラーンに対して、イブン・リドワーンは貧困から身を起こし、独学で学を究めたのであり、このような学問修得法の相違が両者間に軋轢を生み出したと言われている¹⁰⁾。

明らかにイブン・ブトゥラーンが論戦を有利に進めていたにも関わらず、多数の弟子を抱え、医学界を牛耳るイブン・リドワーンの権勢には抗するべくもなく、折からの疫病(ペスト)の流行を機に、失意のうちにカイロを去り、故郷のバグダードに戻ることもなく、アレppo、アンティオキヤを経て、1054年にコンスタンノーブルに着いた。時あたかもビザンツ教会とローマキリスト教会の大分裂(Schism)を迎えており、イブン・ブトゥラーンは博識を買われて両派の仲介役を務めたといわれている。やがてコンスタンチノーブルを離れ、しばらくアレppoとアンティオキヤを行き来していたが、その間、一時『回想録』で有名なウサーマ・ブヌ・ムンキズの祖父、Abū al-Mutawwadj Mukallad b. Naṣr b. Munkidh(1059年没)に仕えたり、アンティオキヤで病院建設の監督をしたりした、最終的にアンティオキヤの修道院に落ち着き、1066年そこで修道士として生を終えた。一説にはペストで亡くなったといわれる¹¹⁾。

彼はまたジュンディシャプール在住の著名な医師、'Ubaid Allāh b. Buchtīshū'と親交を深め、互いに書簡のやり取りを行い、後者のアレppo訪問記中にイブン・ブトゥラーンとの面会記録が残る。また、ブワイフ朝の宰相、Ĥilāl al-Šābīとの書簡が残されている。このような交遊の記録から、イブン・ブトゥラーンは当時、相当の知識人、文人（アディーブ）として名を馳せたことが推測される¹²⁾。

3. 『医師達の宴会』のアラビア医学史上の意義

イブン・ブトゥラーンの医者としての力量は、十字軍時代のシリアの文人政治家、Usāma b. Munkiz (1095年～1188年)が著した『回想録(Kitāb al-I'tibār)』に詳しい。ウサーマは「奇妙な治療法」と題する1章(第2章)をもうけて当時の医療の実体を活写しているが、その中に「イブン・ブトゥラーンの医術における奇蹟」と題する1節を置いている。イブン・ブトゥラーンは、水腫に罹って瀕死の状態から快復した男の薬効解明や、言語障害の者を酔の飲用で快復させたり、また、ひどい頭痛で悩む婦人を樟脳を用いて治療したりしている。さらに、『回想録』の筆者の曾祖父が息子のハンセン氏病罹患を疑い、イブン・ブトゥラーンに相談したが、イブン・ブトゥラーンは、これは面皰にきびであってハンセン氏病ではないと診断し、曾祖父を安堵させた逸話も載せられている¹³⁾。

イブン・ムンキズの著書は「回想録」という性質上、信頼に足る生活誌として貴重な資料であり、この書を通して、当時の人々の実際の暮らしぶりのみならず、思考や行動様式をも知ることができる¹⁴⁾。それゆえ、ムンキズの記す、イスラーム側に比して、十字軍側の治療法がいかに野蛮なものであったかの記述は、医療における彼我の差異を示す信憑性の高い史料と言えるであろう¹⁵⁾。

アラビア医学は9世紀から始まった翻訳時代を脱して、治療の('amaliyya)アッラーズイー(925年没)、理論の(naẓariyya)イブン・スィーナ(1037年没)の両巨人の活躍を経て、この頃(12世紀)には黄金期を迎えていた¹⁶⁾。専門医を擁する病院制度を確立し、システムテックで高度に発達した医療水準はヨーロッパのそれをはるかに凌駕していた¹⁷⁾。ムンキズ『回想録』は両者の医療水準の落差を如実に示し、その間の経緯を雄弁に語る史料となっている。

イスラーム勃興後、広大な征服地で行われた医療行為は、アラビア医学と預言者の医術に大別できる。前者はイスラーム医学と称されることもあるが、イブン・ブトゥラーンのようにその実践者は非ムスリムも含まれることや、「預言者の医術」と混同される恐れがある。それゆえ、本稿ではアラビア医学の語を採用するが、その主な理由は文献の多くがアラビア語で著されたためである。イブン・スィーナはペルシア人であったにも関わらずアラビア語で執筆し、キリスト教徒であるイブン・ブトゥラーンも同様である。

このアラビア医学はヒポクラテス、ガレノスの理論を祖述するもので、9世紀以降、翻訳を通して広まり、イブン・スィーナらにより体系化された¹⁸⁾。このギリシア・ラテン系医学の基本は、いわゆる、4元素(uṣtuquṣṣāt)、4体液(akhlāṭ)、4性質(amzījah)の理論を忠実に受け継ぐもので、治療にあたっては患部のみに限定せず、心身両面に亘る全身のバランスを重視するホーリズム(Holism)の立場を取った¹⁹⁾。

他方、ジャーヒリーヤ期にアラビア半島住民により実行されていた諸種の医術が、預言者、ムハンマドの権威を付与されて「預言者の医術」の名の下に広く実行されていた。その骨子は、「アッラーはその治療を与えること無しには病を下されることはない」という、ムハンマドの言を固く信奉し、病気に言及するハディースの記述に倣って医療を行うものであり、主眼は治療よりも病気予防に置かれ、食事や精神状態に配慮する養生法を推奨した²⁰⁾。

イスラーム世界ではこの二様の医療が現在に到るまで並存しているが、両者の関係は対立を起こすものでなく、また、預言者の医術における4体液説の採用はギリシア文献の影響ではなく、広く古代近東に広まっていた共通知識の一つを継承したものと見なされている²¹⁾。

しかし、近代に到るまで、アラビア医学、預言者の医術を問わず、医療行為は神の行為への介入だとして厳格なムスリム達の非難を受けることがあった。その底流には痛みは神の試練であり、それに耐えることが敬虔さの証^{あかし}だとする宗教的信念があったのである。これは神から創造された身体を毀損する解剖が忌避されたのと軌を一にする思考であり、アラブ・イスラーム文化の一側面を示す²²⁾。

ギリシャ伝来の医学を受容し、発展させたアラビア医学は、イブン・スィーナーやアッラーズィーらの哲人医師の活躍により、早くも9世紀には頂点に達していた。イブン・スィーナーの『医学典範 (al-Qānūn al-Ṭibb)』は10世紀にはラテン語訳され、以後、近代医学の勃興に至るまで、長くヨーロッパ各国の医学教育の中心的教科書の地位を保っていた。

他方、膨大な「臨床記録」を残したアッラーズィーは、その著『大全 (al-Hāwī)』のラテン語訳により、ヨーロッパにおいてもArazesというラテン名で知られ、イブン・スィーナーの『典範』と並んで医学の標準的な教科書として使用され、両著作はフランスのモンペリエ医科大学では1600年代まで使われていたことが知られている²³⁾。

アラビア医学史上、イブン・ブトゥラーンはこの二人の偉大な学者の中間に位置する。アラビア医学が高度に発達した時代に生を受けたイブン・ブトゥラーンは、物した医学文献の水準の高さのみならず、『養生表 (Taqwīm al-Ṣiḥha)』という斬新な医学面での叙述形式を生み出したことで殊に名高い。

「taqwīm」は語根qwmの派生形第2形の能動分詞であり、語源的には「矯正」を意味するが、イブン・ブトゥラーンはこの語を「養生、健康維持」の意味で使い、具体的には養生に関わる事項を一覧し易いようにまとめた「健康暦、養生表」の意味で用いた²⁴⁾。

一体に、洋の東西を問わず、近年にいたるまで、医者や医療は一般庶民には無縁の存在であり、彼らはいわゆる民間療法や食餌療法に頼らざるをえなかった。また偽医者や跋扈もこのような不備な医療情勢を背景にしているだろう。後述のように、『宴会』を含めマカーマート・ジャンルにおいて偽医者や跋扈がしばしばテーマに取り上げられているのがその一端を示す。高度に医療が発達したイスラーム社会においても事情は同じであり、健康維持の中心は食餌療法であり、病気に罹ればコーラン読誦や諸種の呪^{まじな}い行為、さらには護符、等に頼るしかなかった。そこに預言者の医術の存在意義がある²⁵⁾。このような情勢下、気候や季節、地域に合わせた『養生表』が重宝されたことは想像に難くない。それゆえ、同書はヨーロッパ各国語にも翻訳され、多大の影響を与え続けた。

イブン・ブトゥラーンの医学上の著作としては、『医師達の宴会』と『養生表』を除けば主要な著述として以下のものが伝わっている²⁶⁾。

1. 『病気の治療法 (Tadbīr al-Amrād)』
2. 『修道院生活の手引き (Kunnāsh al-Ruhbān)』
3. 『鶏の雛の体温論 (Maqāla fi al-Furūkh)』
4. 『イブン・リドワーン説への反駁 (Maqāla fi Munaqidāt 'alā bn Ridwān)』
5. 『ガレノス概説 (Mukhtasar Jālīnūs)』
6. 『薬剤服用論 (Maqāla fi al-Adwiya)』
7. 『病因論 (Maqāla fi 'Illa al-Amrād)』

上記以外にイブン・ブトゥラーンは『奴隷購入論』というユニークな著作でも知られており、世界各地から集められた人々の地域別の特性や、医学的注意点が書かれている。この作品にはMezの抄訳がある²⁷⁾。

『医師達の宴会』はこのような高度な医学専門書の著者が、その該博な医学知識をフィクションの創作に援用するとともに、論敵イブン・リドワーンを髣髴とさせる人物を一方の主人公に仕立て上げてリアリティを高めた稀有な著作となっている。

4. 『医師達の宴会』のアラブ散文史上の位置

アラブ文学の中心は詩であり、遅くとも5世紀初頭にはカスィーダと呼ばれる定型長詩が成立していたと考えられている。カスィーダは以後、現代にいたるまで連綿として詠い継がれてアラブ文学の中心に位置している。アラブ文化圏におけるこの韻文の隆盛に比して散文文学の出現は遅く、その嚆矢は8世紀のイブン・ムカッファア訳の『カーレーアとディムナ』と見なされている。そして9世紀にジャーヒズが出現してアダブ・ジャンルが成立し、以後、陸続と散文作品が書かれるようになるが、その主流はアダブ作品と呼ばれる各種逸話を集成したアンソロジーで、教養人（アディーブ）としての必須の知識を網羅した内容を主としており、近現代の文学やliteratureの語が示すものとは大きく乖離する²⁸⁾。

つまり、イブン・クタイバ『情報の泉』やイブン・アブド・ラッビヒ『類稀なる首飾り』を代表とするアダブ作品は、新興の書記官僚や文人（アディーブ）たちに規範となる教養（アダブ）を付与する目的で編まれたもので、単なる娯楽目的の文学作品ではなく、いわば処世術指南書である。そして、その内容は過去の逸話の集成であり、想像力を基にした創作ではなく、集成した逸話に出处と伝承経路（イスナード）を付し、あるテーマ毎に配列したものである。ゆえにアダブ作品はフィクションではなく、その出現は10世紀のハマザーニーを待たなければならなかった。

この散文文学の成立の遅さは、アラブ・イスラーム社会に根強く底流していた「フィクショナルな散文作品に対する忌避感」に由来する。自由に想像力（＝創造力）を発揮できた韻文作品とは異なり、統治上の必要性による行政文書や外交文書作成から派生した散文は、何より内

容の信憑性を求められていた。また『コーラン』を補完するものとしてムハンマドの言行が収集され、各種の「ハディース集」として纏められたが、そこでは内容 (maṭn) よりも伝承過程 (isnād) が重視されたが、アダブ作品は各逸話にその伝承過程を付すことで「ハディース集」の体裁に倣っていると考えられている²⁹⁾。

他方、アラブ散文成立には文人や書記官僚が物する「書簡論文 (risāla)」が重要である。これは公開を前提にした書簡であり、あるテーマを論ずる内容を主とし、博識と文才を披露する手段としてアラブ散文の文体確立に多大の影響を与えた³⁰⁾。

このように、アラブ散文は行政・外交文書作成の必要性から生まれ、一方では書記官僚や官僚予備軍のための手引書 (アダブ作品)、他方、文人を主として成立した書簡論文 (リサーラ)、という大きな二つの流れの中で発展し、彫琢されてきたものであり、必然的にフィクショナルな作品が生み出される余地はなかった。

散文をめぐるこれらの動きを背景に、ハマザーニーが虚構性を^{あらわ}露にした斬新な『マカーマート』を著した。このハマザーニー作品を濫觴とし、ハリリーによるマカーマート・ジャンル成立までの1世紀の間、様々な内容、形式のフィクショナルな作品が出現した。このことは、文学を生み出す背景にある共通の文学空間、社会環境の存在を示すものである。

ハマザーニーからハリリーの間に叢生した『マカーマート』近似作品を列挙すれば、『宴会』を除いて、Ibn Nāqiyā (1092年没)、Ibn Shuhayd (1035年没)、al-Ma'arrī (1058年没)、の3作品である。

イブン・ナーキヤー作品は全10話 (マカーマ) からなり、ひとりの主人公の悪行を目撃者が語る形式で、その形式、内容、語りの構造の各面からハマザーニー作品と類似している。ただし、場面が一定の点と、主人公があくまで低俗な犯罪者である点において、ハマザーニー作品と大いに異なっている。ハマザーニー、ハリリー、両作品の主人公は諸学を修め、雄弁と博識を武器に諸国を遊行している人物である³¹⁾。

イブン・シュハイドの『二詩霊の書簡 (Risālat al-Tawābī' wa al-Zawābī')』は様々な詩霊 (ジン) との対話を骨子とするものでマアッリーの『赦しの書簡 (Risālat al-Ghufrān)』と同工異曲の作品である³²⁾。また、マアッリー『驢馬と騾馬の書簡 (Risālat al-Ṣāhil wa al-Shāhij)』はこれら2種の動物が対話を交わす形式で、イブン・ムカッファア訳『カーラとディムナ』を嚆矢とする動物寓意譚に近似している³³⁾。『二詩霊の書簡』『驢馬と騾馬の書簡』とも詩霊や動物という人間ならざるものを主人公に設定しているところに、フィクションの忌避、というこの期におけるアラブ文学の特色を示している³⁴⁾。また特に後者においては文体面に技巧を凝らし、対偶表現を核とするサジュウが散見され、ハリリーの流麗な文章とのつながりを見せている。

このようなハマザーニーからハリリーの出現までに書かれた近似作の中で、『宴会』は、①リサーラというタイトル、②フィクション性を露にしている、③一人の主人公 (偽医者) の回想譚、④サジュウを多用し、詩をふんだんに挿入する文体、の各面において、ハマザーニー、ハリリー両作品に最も近似していると評価できるであろう。つまり、動物寓意譚という架空性を脱して、現実の生活、庶民の実態をリアルに描いている点に斬新さが現れているのである。さらに、『宴会』の彫琢された文体、交わされる専門用語は、挿入される詩と相俟って文人 (ア

ディープ)の嗜好に合致した作品となっており、ハマザーニー、ハリーリー両作品と通底する特徴をなしている³⁵⁾。

またテーマにおいて医者を詐称する若者の主人公と、吝嗇家の内面を隠して隠然たる勢力を誇る長老医者との攻防は、ハマザーニーも取り上げている「トゥファイリー」というアラブ文学のトposであり、この点においても、『宴会』はハマザーニーとハリーリーをつなぐ位置にある。ただし、イブン・ブトゥランはおそらくハマザーニー作品を知らなかったと推測され、彼がいかにしてこのような作品を着想し、創りあげたのかという成立過程は謎のままであり、文化、文学の自生という観点から興味深い題材をも提供している。

5. 解題『医師たちの宴会』

『宴会』のテキストを校訂したクライン＝フランケによれば、写本はミラノ、エルサレム、ベルリン、イスタンブール、の4種が確認されており、それらは2系統の伝承過程で伝わっている。しかしながら、これらの写本のなかで何れが原本により近く、また信頼に足るテキストであるかを確定するのは難しいと判断し、①lectio proclivisよりlectio arduaを優先させる、②サジュウの語法に従って前後関係に合致する読みを採る、の2原則に従って、クライン＝フランケは自身の手書きで校訂本を出版した³⁶⁾。

また刊行本としては1901年のアレクサンドリア版と1920年のカイロ版があるが、クライン＝フランケによれば、共に校訂の不十分なもので、後者は前者の複写版である。ゆえに、本稿ではクライン＝フランケ校訂本を使用し、同氏による独訳を参考にした。

『宴会』の注釈としては、医学的事項に関するIbn Athradīによるものが知られているが、クライン＝フランケは独訳本に併載(pp. 112-144)しており、本稿でもそれを参照した。

『宴会』は12章(bāb)に分れ、第1章で偽医者である若者と狡猾で吝嗇な長老医者とがマイヤーファーリキーン(『宴会』は当地のアミールに献呈された)で出会い、若者は自身の食が細いことを告白し、長老は耳聡くこの発言を捉える。第2章で招かれるままに長老医師宅に行き食事を供される場面が描かれ、第3章から長老が呼び寄せた配下の医師達との宴会場面が展開する。そして、第4章から第9章まで、各専門医からの質問を受け、偽医者たる若者が無知をさらけ出し、その度に長老から揶揄、嘲笑を浴びる場面が続く。10章と11章は医師たちが医道が廃れて医学が省みられなくなり、医師の地位が低下したことを交々嘆く場面が描かる。やがて一堂は話し疲れて寝込んでしまうが、その期を捉えて若者と召使は散々に飲み食いする。そして、目覚めて二人の狼藉を目にした長老は、その吝嗇家たる本性を現し、折角のご馳走が食べ尽くされたことに失望落胆し、悲憤慷慨する。そして最終章(第12章)で傷心のままにこの町を後にする姿が描かれる。医師から締め出しをくらい、マイヤーファーリキーンを後にする若者の姿は、そのまま著者がカイロを追われた姿であり、老獪な長老医師像は論敵、イブン・リドワーンを彷彿させる。

第4章から第8章で交わされる医学談義・問答の章題は以下の通りである。

第4章 内科(医)(ṭibā'ī)

- 第5章 眼科(医) (kahhāl)
- 第6章 外科(医) (jarā'ihī)
- 第7章 瀉血(師) (fāṣid)
- 第8章 薬剤(師) (ṣayādila)

このように『宴会』は偽医者と長老医者との、会合→集会(宴会)→別離、という首尾一貫した構造を成しており、ハマザーニーやハリリー作品同様、この構造が繰り返される円環構造をも予想させる。

本稿第4章で考察したように、マカーマート史上、『宴会』はハマザーニーとハリリーとの間に叢生した作品群の一つであり、両者の特徴を併せ持っている。両者の『マカーマート』では偽医者をテーマとするマカーマがあり、ハマザーニーは第21話「モースルのマカーマ」で、主人公イスカンダリーを偽医者に仕立て上げ、死者を蘇らせる口実で純朴な村人を誑かすテーマで話を展開させる。他方、ハリリーは第39話「オマーンのマカーマ」では産婆術を、第47話「ハジュルのマカーマ」では刺烙師をテーマにしている³⁷⁾。このように、ハマザーニー、ハリリーの『マカーマート』で医術、特に偽医者、をテーマとするマカーマの存在は、当時、医師にかかれず、医療から遠い位置にあった一般大衆の実態の一端を示すものである。

『宴会』は特にハマザーニー作品との類似性が濃厚であるが、殊に、上記の医術をテーマとするマカーマにおいて、①顕著な社会風刺性、②トゥハイリーのテーマ、③マディーラのトボス、の各点において近似している。

ハリリー作品の主人公、サルージーはアダブを修得したアディーブであり、博大な学識を披露して報償に与るストーリーが基本パターンであるが、ハマザーニー作品では、主人公イスカンダリーは食い逃げを筆頭に、生活のために様々な悪行を行い、しばしばその犯行は露見し、手酷い罰を受ける。前者はいわばアディーブとしての完全人間であり、その報償は学識披露に対する当然のものであり、賞讃詩を朗唱して褒美に与る詩人と同じであり、何ら非難するに値しない。他方、ハマザーニー作品の主人公は小細工を弄し、時に犯罪同然の詐欺行為に及び、悪事が露見して手酷い罰を受けることもある。『宴会』中の若者(=偽医者)は、このハマザーニー作品の主人公を髣髴させる。

洋の東西を問わず、食と文学とは近接しており、食事の場での会話は言うまでもなく、食事や宴会をテーマとした「饗宴文学」というジャンルが古くから確立している。その嚆矢は古代ローマのペトロニウス『サテュリコン』と見なされているが³⁸⁾、アラブ文学においても、「酒讃詩(khamriyya)」がジャンルとして確立している詩は別格として、散文文学においても「饗宴文学」に擬せる作品群がある。それはジャーヒズの『吝嗇家』を筆頭とする食を題材として取り上げた作品であり、特にアダブ文学、わけでも百科全書的アンソロジー、において顕著である³⁹⁾。そして『宴会』はアラブ文学における食文学の伝統を継ぎトゥハイリーを主旋律にしながらも、医療をテーマに話が展開する稀有な作品となっている。

なお、執筆規定に則る紙数の制約により、前置きとも称せ、長大な第1章(原文3頁～15頁)は省略し、長老医師宅での主客の会話が始まる第2章から訳出し、6章までに及ぶ。また同様

の理由により、注記は理解を補う必須の個所に限定した。医学をテーマとし、作者の該博な知識が込められた特異な作品だけに難解な個所も多く、不明な点も多い。ドイツ語訳書においても注記無しに随所に省略個所があり、訳者、Klein-Frankeの厳密な学風からして不注意な遺漏とは考え難いが、本稿においては省略個所は（※）を付して明示した⁴⁰⁾。また（ ）内は原語の音写と、意味を通りやすくするための補足である。

[アラビア語転写法 'b t t h j h k h d d h r z s s h š d t z ' g h f q k l m n h w y]

6. 『医師達の宴会』 翻訳

第2章「宴会の様子と食を妨げる諸種の口実」

(連れて行かれた)屋敷は調度品から見て裕福さが窺われた。しばらく座って話をしていると、召使 (ghulām) がパン (khubz) と酢 (khal) を載せた盆と手布を持って現れた⁴¹⁾。男は主客の前にそれらを並べて、こう詠いあげた。

歓待⁴²⁾ は料理の多さが示すのではなく
 高貴な面こそその徴
 旅の荷をまとめる前に客人に笑みをもたらし
 いかにみすばらしくとも、豊かさ、われに在り

そして主人は、「お許し下され。家の戸を叩くものあれば招じ入れ、招かれたならば断らないと申すとおり。またはやり歌にも、戸を叩く音には答えあり、宴席には断らず、とあるように。日はまだまだ長うございます」と言ってパンを一切れちぎった⁴³⁾。「老妻はパンには特に気を使っている、この男(召使)にパン作りを教え込んでいます」⁴⁴⁾。

「さあ、お食べ下さい。小麦をよく洗い、十分に捏ね、塩加減も程よくし、ハルナジュ (khalnajiyy) ⁴⁵⁾ で香をつけ、片面はこんがりと焼いて簡単に噛み切れ、消化し易く、(それだけ) 体にも良いのじゃ」と(早速の) 自慢話。そしてチシャ (hindibā) ⁴⁶⁾ を一掴み取り、「お分りかな、お客人。最良のチシャでな、肝臓 (kabd) の病にはすぐ効き目があり、体の凝りを取り去る。このチシャの絞り汁はしばしば大黃 (rāwand) と混ぜ合わされてな。お客人、まあこの幅広の葉をご覧あれ。何と青々としていること。食べればその甘さは天下一品。瑞々しく新鮮この上なし。これに強い酢をかけて食べるともう堪りませんぞ。胆汁 (safra) の回復にはこれを食べるにしかず。ですが神はこの男の寿命をば延ばしはなされなんだ。というのも、こやつは先日来間違いを繰り返し、混ぜ物もほんの少ししかもって来ないのじゃ」。

(ところが) 何の気なしに、チシャをほんの少し口にするや否や、もう背中を突きぬけ脳天まで届く苦さで鼻血まで出る始末。涙は溢れ、咳きも混じり、その後数日間、痛みは消えなかった。

(それを見て)「用心して食べられよ」、と声をかけたので、再び食べようとする、「養生 (himya) しようとの意図 (niyya) をお示しになっていたのでは」⁴⁷⁾。

「また別の日に」と答えると、「神のお慈悲を遮るほどの罪はありませぬぞ。懺悔を遅らせる

のは最大の過誤であり、また病よりひどいのが養生を日延べすることですぞ。調停者こそ弁護依頼人の敵であり、向こう見ずの医者こそ死の天使の使い。有害な物を口にして病に罹った者は、絹物を織り進むにつれて増えていく虫（dūda）も同然じゃと古人も申しておる」。

「どうも養生は苦手です」と答えると、「確かに養生というものは難しい。しかし、気の進まぬものの中で最も気高い行いですぞ。ピタゴラスも言うように、胃袋を制する者は全ての身体器官を平衡に保つのですぞ⁴⁸⁾。ましてそなたは医学に励む者。この教訓を何より必要としておると思うがな。医者が有害な物を口にするのを見るほど醜いものではなく、法学者（faqīh）」が悪事を働くのと同じこと。神にすぎり、養生をお決めなされ。さすればこれらの食べ物も明日には違った風に見えること。（*）食べなされ。今耳にしたことを実行することじゃ。この忠告は健康への道、この苦言は知恵を飾るもの」とのたまう。

そこで食べようと手を伸ばすと、「まあ、食べる前にわしの話を聞きなされ。悩みに効き目があり、健康を取り戻す術をお教えしよう。病人はまず口を閉じ、掌を合わせ、理性を働かせ、決して無知と欲望に身をまかすことのないように。知恵は有益な食事を求め、欲望は食欲をそそる美味な食べ物をば欲しがるものだ。有用な物と美味なる物は決して両立せず。若い衆よ。ご馳走を喰らい、その拳句に苦い薬の世話になるなかれ」と言って、こんな詩を一曲さり。

甘さに酔いしれる時には苦きも同様
苦さに害ある時には甘さも同様
苦さを取りて益に与り
（ゆめ）甘さに溺れて害を招くことなかれ

「一時の慰みに溺れるとやがて手酷い害に襲われる。ましてそなたは病の身。もう腹はくちくなくなったであろう」。

そこで、「お話、長々と伺いました。食べ物を何とか」と言うと、「空腹は嘘つきであり、欲望は曇気楼のごとし」と涼しい顔。

消化には程よい一時が必要で
全て物事には定めの時がある
求めることを急かず
機、熟するまで危機に溺れず

「ではどれほど食べればよいので」と聞くと、「節制することじゃ。重病は食べ過ぎから起き、あらゆる生き物を滅ぼし、砂漠の獅子をも命を落とす。消化不良が続くと破滅の身、こなれたとしても体は弱る一方。ヒポクラテス曰く、『見かけに騙されることなかれ。回復途上の患者がしばし覚える空腹のごとし』と」。

これに対し、「しかしそのヒポクラテスが同じくこう申しております。『病は旅と同じで、病人への食事は旅人の携行食と同様』と。それゆえ、医師たるもの病が癒えるまで食事に気を配

り、病がぶり返さないように配慮すべきでは」と言葉を返した。

すると「不潔な体は食べ物を摂りこむ毎にますます悪しきことが増大する、と古人が言っておるのをご存知か」と聞く。

そこで、「仰せの通り。しかしまた、古人は病人の希望には沿うようにと申しております。例え害を及ぼす事があるろうとも食欲をもって食べるのは、有益であろうともいやいや摂る食事よりもずうと役立つと」と言ってやった。

これに対し医師は、「そのとおりじゃ。しかし、余計な物を詰め込んだ体は、いかに良い滋養物であろうと、その本来の性質に変えてしまう、とも古人は述べておるな」と返す。

「食養生が可能である限り、薬の服用は控えるように、とも言っておりますな」と私。

「そなたの胃は働きが悪く、内臓は汚れきっておる。それゆえ、食べ物に手を出すと、苦しむこと必定じゃ」と医者。

「長老どの。わたくしめは神のご加護を求めながら食事を致します」と私。

「全知全能の神にお任せいたす。寿命が尽きれば死は胃に宿るぞ」と長老。

ここで返すことばに詰まり、食べようとする、「食べるのか?」と聞くので、「神のご意見を求めます」と言う、長老は、「そなたが恵みを与えられますように」と言った。しばらく黙っていると、「ゆっくりと、ゆっくりとな。知恵に知識がつくと同じく、全身に栄養を行き渡らせれば病から回復するというのを弁えて。腐敗した食べ物は体を駄目にし、体力も精神力も最低にまで衰える。しかし、真の知識によって精神は清められ、それにつれて肉体も最高度に強化され、靈魂の定位置、力の存在個所、光と輝きの源にまで行き着く。賢者は『人はパンのみにて生きるにあらず、^{いで}出くることばによる』⁴⁹⁾と申している。またソクラテスは、『必要以上に食べずに控えめに』と述べる。またプラトンは、『生きるために食べるのであって、食べるために生きるのではない』と警告しておる⁵⁰⁾。かじりつくことなく、ゆっくりと時間をかけ、千に一度しか糸を切らさぬ熟練の織り子のごとく、急ぐと良いことなし。先人のこの言葉を胸にして。

耐えてこそ望みのものを手に入れる

急ぐと足をとられて前には行けぬ

そこで、「こんな詩がありますが」と言って、詩の一節を披露した

ためらいから機を失する人の多さよ

急ぐことこそ決断の人

「食べる決心をしておるならば、一口分は小さく、それをまず前歯で噛み、次いで臼歯でよく噛み砕き、舌で捏ね、まず汁だけを飲み込み、再び臼歯で混ぜ、そこに野菜を混ぜる。だが、香辛料はつけ合わさぬよう」。

目覚めし魂の求めることの多けれど
わずかの施しで満足す

「肉には気をつけなされ。ソクラテス曰く、『腹を動物の墓場にするなかれ』、と⁵¹⁾。またガレノスも、『手当たりしだいに口に入れる者こそ無知蒙昧の輩。胆汁には酔っぱい物を、粘液には塩気の物を、黒胆汁には脂肪質』と、その性質に合ったものを食べるのじゃ。胆汁はまるで童^{わらべ}のよう。果物に歓声をあげ、咎める言葉には不満顔。黒胆汁は雄牛。女子供でも引っ張っていけるが、いったん怒れば、もう手がつけられぬ。粘液は獅子。たとえ死んだとて、駆り立てるのは奴隷を追い払うのと同様の力が必要。血液とは仲良く友だち付き合いをすることだ。黄胆汁には上司と接する態度で。そして、黒胆汁には敵と戦う心構えで。あまり彩りを多くしないように。というのも、性質の異なる物を食べると、消化時に胃に余分な熱が生じ、力に変えることができなくなるからじゃ。噛み砕くのに努力がいるものは食べない。これもまた消化時に胃に負担となる。内臓に、食べ物^{食べ物}が3分の1、飲み物が3分の1、そして空気が3分の1となるように食べなされ⁵²⁾。便所に頻繁に通うことがないように量は控えめに。食欲を増進させる冷水は少しにして、理性で欲望を抑えて身を守る。こうできる人士の何と稀なことよ。女を求め、恥さらしに及ばぬ者がいないのと同様だ。悪に手を染め、なおかつ身を減ぼさない者などおらぬと同じこと。食べるだけ食べ、飲むだけ飲んで、なおかつ病に罹らぬ者などいないのと同じことだぞ』、と長の説教。

長老はこの長広舌で何とか食べ物に手を伸ばさせぬ手段。話はだらだらと続き、話の種は尽きないので、戯言^{ざれごと}を聞き流して、酢と野菜に手を伸ばそうとすると、それ以外の付け合せを出そうとも、また食べるように勧めようともしなかった。はてはもう満腹したと見て取り、酢と野菜だけで十分なのだと思い込んで、「これを下げて、焙り肉をお持ちしろ」と召使に声をかけた。

男が焙り肉を並べ終え、早速、肩肉に手を伸ばすと、「それはお止めなさい。肩は心臓より悪い物を受け入れておる」と長老より声がかかった。そこで、胸肉に手を出すと、「そこは消化に悪い」と一声。仕方なく腎臓の部分に手を伸ばすと今度は、「ここは尿と血液の製造所じゃ」とのたもう。そこで、腿肉を食べる素振りを見せると、「それは腸と糞に近い部分じゃぞ」との仰せ。「尻肉はいかがですか」と聞くと、「ああ、尻肉はこなれが悪いが食欲をそそり、げりを引き起こすのじゃぞ」と注意する。

「では、どこを食べればよいので」と聞くと、「脛の部分じゃ。そこは羊肉の最も美味な所で、特にこれはまだ母親の乳を吸っておった若肉なんじゃからな」、と言って、傍らの肉を取るように目配せし、「後脚を取りなされ。前脚のほうが優れておるが。そして左脚をな。右脚は柔らかく、心臓に近いゆえ温ったかく、また排泄物からも遠いのじゃ。お取りしましょう。そうでないと悪い部分をお食べになってはいけませぬからな」と声をかけた。

長老は干からびた部分をつつまみ取り分け、「さあこれをお食べ成され。草を食む時も駆ける時もここで支えておるんじゃ。さあさ、お取りなされ、お従弟^{いとこ}よ」と言うので、受け取るや、召使に、「不幸を避け、災いが及ばないように、早くお下げしろ。食欲は破滅へ到る道であり、

手酷い害を蒙る基ですぞ。たった一食がその後食事を口にできなくしたことが多々ありましたからの」と言ってから、「次の料理をお出ししろ」と声をかけた。

召使は牛肉のマディーラを並べたので、早速食べ始めようとする、「よいかな。食事と言うものは自分の体質に合ったものを食べるべきで、この牛肉のマディーラはそなたのような症状を呈している人は避けるべきだと昔から言われておる⁵³⁾。また、牛肉と乳、牛肉と魚も一緒に摂らないようにとみな。そんなことをするともうてき面に、関節痛、痛風、麻痺、疝気、中風、に襲われる。食欲を起こしてマディーラに手を出して害を招くことのないように」、とまたしてもお説教。

やおら召使に、「下げなされ。急いだほうが良いぞ。客人の食欲を正しい方向に導いたかどうか自信がないし、このマディーラのせいで悪い病気に罹らせるといけないのでな」と伝える。

こうしてマディーラは下げられ、次にミルクで炊きこんだ飯が並べられたが、羊肉の下に引かれていた(残り)物だった。別に食欲をそそる物でもなく、腹に詰め込む気にもなれなかった。

わたしの気の進まぬ態度を見て取った長老は、怒りの表情を^{あらわ}露にし、召使に料理を下げるように命じた。男は甘いもの(デザート)の注文だと思って、彩り良く手の込んだ甘い菓子车载せた大盆を前に並べた。それを眼にした長老の怒りは燃え上がり、滴り落ちる涙で器は満たされる始末。

「おお神よ、数々の酷い悪からお守り下さい。そなたに良かれと思って口にしたのだが、こんなに大事な忠告も他にないぞ。まあ、わしの忠告に従いなされ。甘い物は歯には害を及ぼし、口と舌に吹き出物を作り、ことに冷たい水といっしょに食べると靨面じゃ。ある時、カリフ、マームーンが侍医のジブリールに歯痛を訴えたことがあった⁵⁴⁾。すると、『信者の^{おさ}長よ。熟した(甘い)物や砂糖を口にした後には冷たい水はお避け下さい』と助言した。これに対し、『痴れ者。そうできないからそちの世話になるのじゃ。一体、冷水と甘いものを避ければ、他に舌に残る(甘美な)物があろうか?』と言ってジブリールに反論し、そのためカリフの歯はご存知のごとくになってしまった⁵⁵⁾。そういう訳でこの器の物は諦めなされ。賢者たるものは美味な物で健康を損ねはしませぬぞ。そなたの決心の程をお示しなされ」、と長々と説教する。

「食事と信頼を神にお捧げ致します(tawakkul)」と一言のべた⁵⁶⁾。

「甘いものは諦めたが、神への信頼はどうか?」と疑いの表情。そして、「医者とは神と患者をつなぐ者。すなわち、神の慈悲と報償、そして、患者の訴えと望み、この二つの仲立ちをするのじゃ。医者を目指すは快癒、その努力するところは助言を与えることであり、あらゆる人間の健康回復のためである」との訓戒。

体のなかで魂が怒れば、

(医者は)魂と肉体を調和させる

考え正しければ

肉と骨の間を歩むごとし

わしのことを悪く取らんでな。いろいろ言ったり、さまざまなことをしたがな、物惜しみか

らと思わんでな。全てはそなたへの心からの忠告で、気落ちせぬように。よくわしも色んな美味しいものが欲しくなる。しかし、食べた後のことを思うと手は自ずと出せぬ。食欲に負けそうな時には、食後の痛みや苦しみを想像したり、また様々な治療器具を前に広げるのじゃ」。

こう言ってから召使に、「甘い物は下げて、次のものをお出ししろ」と声をかけた。

この老人が別な皿や新しい料理を求めているものだ⁵⁷⁾と露疑^{つゆ}わなかった。だがしかし、食卓に並べられたのは抜歯用のヤットコ (kalabāt al-adrās)、脾臓や頭部用の焼灼器 (makāwī)、血吸蛭用 ('alaq) のペンチ、矢 (nushshāb)、白内障用の針 (ṣanānīr al-sabal wa-al-ḡufur)、疼痛用の槍 (zarrāqāt al-qūlanj)、尿道用のゾンデ、痔用の万力 (milzama al-bawāsīr)、鼻用の旋盤 (mikhraṭa)、下げ振り (raṣāṣ al-tathqīl)、漏用カマ (minjal)、鉤 (makhālib)、疥癬こすり (miḥakk al-jarab)、切断用ノコギリ (minshār al-qaṭ'), そこひ用の針 (miḥatt al-qadah)、耳掻き (mijrafa al-udhn)、瘰癧除去機 (warda al-sil'), 皮膚炎除去機 (qamādīn al-jarab)、肩用副木 (khashaba al-kitf) (*)、コホル箱 (durj al-makāhil)、軟膏 (marahim) 入れ、刺烙針 (ランセット、mabādī) 容器、であった⁵⁷⁾。

並べられた器具を眼にして、(それらが使われた時の) 痛みや病状を考えて一気に食欲を失った。

長老は、「お客様、健康を神に感謝し、いつまでも健やかでありますようにとお願ひしなければなりません。これらの器具はみな食事や咀嚼用で、体には良いとお考えになりませぬかな?」、と聞いてきた。

神は食べ物を祝福なさらぬ
魂の滅亡が胃に宿るゆえに
食べ物が腸に取り込まれるごとに
霊は体から抜け出る

そして召使に、「この食べ物からわしらを解放し、手洗い盆 (tasht) とアルカリ (ushnān) を持ってまいれ」と命じた⁵⁸⁾。

そこで我々は手を洗い、長老は枕に凭れかかった。それから、「お客様、少しお喋りでも。いやあ、楽しい一時じゃった。ブスティーは見事な言葉を残しておる一彼に神のご加護があらんことを」⁵⁹⁾。

思いを一つにする歌が披露される宴会ほど
心楽しいものもない
とかく無知な輩の性格には困りもの
水腫男 (istisqā') の咳きと同じこと (*)

そこで、「ご主人さま、食養生を行っている限り、あの練り物 (ma'jūn, 薬) が頼りでございます。そこで一つお教え願えないでしょうか。いつ服用し、量はどれ位かを」と聞いた。

すると、「(*) そなたには胃の働きを強くする前に、まず食欲を絶つことが要求されておる。もう食べ物の方はほっておいて、一つ珍しい話でも聞かせてくれぬか？」と所望するので、「押しかけ食客 (tufayli)⁶⁰⁾ の話なら？」と答えた。

「して詩ではどんなものを？」とさらに聞くので、「食客 (taṭfīl) の歌を」⁶¹⁾ と返事した。すると、「何かのはやり歌は？」と尋ねたので、こんな一節を吟じた。

そなたの所を訪問するが、苦しみを与えるためではない
貴人は求めがなくても人を訪れるもの
たとえ遠くにあろうとも、焦がれる心は遠しとせず
恋に陥れば千里の道もいと遠からず

「これまでどんな仕事をしてきたのかな？」と尋ねたので、「料理 (tabikh) でした」と返事をする、「医学ではどんな修業を？」と再び聞くので、「ラクダ (nāqa) の治療法を」と答えると、「それで、胃が弱くなった原因は何じゃ？」とさらに聞く。そこで、「ひどい空腹ゆえに」と返事をした。

さらに長老は、「なぜバグダードを離れたのじゃ？」と尋ねるので、「物の値段がどれもこれもとんでもなく上がり、もう酷いことになりました」と答えた。この答えに気を悪くし、座り直して、またソファーに身をもたれさせて、こう詠った。

禍福の^{あざな}糾いは時の定め
幸もあれば不幸にも会う

「お薬をお出し頂けぬのでしたら、一つお尋ねしても宜しいか？」と聞くと、「言ってみなさい」との返事なので、「いと神聖な問題でして」と前置きしてから、「なぜに私はお酒をいただけず、また胃の調子がいつも良くないのでしょうか？」と聞いてみた。

すると、この質問は長老を驚かせ、「食事に関して胃は強壮だが、こと飲酒については虚弱なのが教養ある人種 (ẓarīf) の常なのじゃ」と説明した。

第3章「宴席の様子とそこで交わされた医師たちの会話」

(老師は) 私の話をよく理解すると笑みをもらし、話に裏 (bāṭin) も表 (ẓāhir) もないのを確信すると、召使に酒 (nabiz) を持って来るようにと命じた。やがて男は^{ほし}干果物を乗せた盆と盃、それに手水鉢を二人の前に並べた。老師はその盃を手にとって拭いながら、「この盃をよくご覧あれ。これはな、暴動 (fitna) の折にアミールの館から奪い取った物でな。もっと上物を所有していたのだが、この冬の厳しき財政状況の故に、つい必要に迫られて売り払ってしまったのじゃ」、とのたまう。

(そして言葉をついで)「しかしながら、良き時が必ずまた戻って来るであろう。そうすればちゃんと元が取れるというものじゃ。ほれ、詩人が見事に詠んでいるであろう。

光輝く庭園を見た者は、必ず言うは
ああ、あれこそまさに医者の庭
神に頼れぬところを医者に求め
病に苦しむ者が列をなす

特にな、この冬は南風が吹き、雨も多いゆえ、来る春は常の春とは異なって激変し、恐らく神の思し召しにより、疫病（wabi'a）が蔓延する年になろう」とご機嫌の様。

老師はこう弁じてから盃に酒を満たして、また一席。「この酒は長らく手に入れたいと願っていたものでな、ヒポクラテスも酒は喉の渴きを抑え、飢えの苦しみを癒すと申しておる。酒には10の効用があり、5つは肉体に関わり、残りの5つは精神に関わるとな。そして、肉体面への効用は消化を促進し、利尿効果をもたらし、顔色を良くし、また吐く息を芳しきものにし、さらに交接の力を倍加させるとな。他方、精神面での効用とは、精神を喜ばし、希望を叶え、心を高揚させ、性格を改善し、吝嗇を是正するのじゃ」⁶²⁾。

とこう言って一口酒を飲み、召使に、「わしの弟子の瀉血師アブー・ジャービルの所へ行行って、ウードを抱えさせて連れてまいれ。途中で友人の眼科医アブー・アッユーブと外科医のアブー・サーリムの所によって来い。そして、薬剤師のアブー・ムーサーに、『わが命にかけて。今日という日は、一人たりとてわしの処に患者を遣すでない』、と言って参れ」と命じた。

程なく、呼ばれた人々が集り、挨拶を交わすと、彼らは口々に私に症状について質問した。そこで事情を話すと、一同は銘々に生活上の愚痴をこぼし始め、互いに薬種商への払いが残っていると口々に嘆きだした。そのやりとりから、彼らは市井人の面（sūqiyya）が際立ってはいるが、学問（'ilm）と礼節（adab）を旨とする人士とみなした。皆はしばらく沈黙を守っていたが、やがて質問を始めた。

老師は、『今日は酒を飲み、仕事は明日に』⁶³⁾、と言われておるが、昨今、読書も学問も姿を消しておる。というのも、身を削る勉学は心を滅ぼすからだ。それガレノスも、『学者は力と動作の源である身体を衰弱させないために暫時思考を停止すべし』と注意をしておる」、と言ってから盃を満たして、弟子の一人にこう言い聞かせた。「それ、リュート（'ūd）は4つの性質から成り立っておるぞ。まず、義甲（ピック）と歌手の関係は、刺烙師（fāṣid）とその針（mibda'）と同様じゃ。そして、弦は静脈と同じ働きをし、胴は神経と等しい。そして今述べたことを念頭に置いて弦はその外側を弾くのじゃ。わしの弟子であるジブリール医師にアブー・ヌワースの詩を一曲歌わせろ」、と命じた。そこで召使が弾き始めると、ジブリールはこんな歌を披露した。

有徳の士、アブー・イーサーとジブリール
われを咎めたその時に
酒（rāḥ）は無上の喜びと答えるや
過ぎたるは身を滅ぼす、と警告す
では適量はいか程か

何せ無上の酒好きゆえに
それがし承知しておるは
5体には4種の液体が流れておること
1体液には1ラトル (raṭl)
つごう合わせて4ラトル

さらに声張り上げて、こう歌い継いだ。

人跡途絶えし丘を後にし
無人の草地に立ち止まる
われに酒を注げよ！
リュートとドラムの鳴る中で
静かに奏でよリュートをば
ヒポクラテスが脈を取るごとくに

一同はおおいに飲み楽しんでいたが、私一人は置き去りにされていた。もう飲み物にありつけないと諦めて、干果物菓子 (naql) でも口にしようと考えて、長老に「どの菓子が一番体に良いとお考えですか」と聞いてみると、「(カリフ) アル＝ムタワッキルがジブリールに同じ質問をした。その時、『信者の長^{おき}よ、それはアブー・ヌワースが詠んだ通りで御座います』、と答えたのじゃ。『それはどのようなものじゃ』とカリフが尋ねると、ジブリールはこんな詩を告げたのじゃ。

わが親しき中に誰一人、かような人は見当たらぬ
水といえば葡萄酒、菓子は口づけとする人物を

とこうカリフに答えたのじゃ。そなたの場合もまさにこのとおりじゃ」。

この言に、「仰せの通りですが、カリフ宮廷には1万2千人もの妓女がいたからこそ、ジブリールはそんな処方を出せたのでしょう。私はといえば、眼科医のアブー・アッユーブ様か、外科医のアブー・サーリム様を信頼して干果物を望んでおるのです」、と言い返した。

長老はこの言葉に気を悪くし、「そなたは医者だと言わなかったかな」と尋ね、そうだと答えると、「何を専門としておるのか」、と聞いてきたので、「内科です」と答えた。

第4章「内科に関する質問と古代の医学書に無知さの暴露」

老師は「それでは質問いたそうか」と言ったので、「どうぞ」と答えると、こう詠い始めた。

苦痛や病に罹りませぬように、主におすがり申す
また、罹った折の処置をもお願い致します

ふとしたはずみで犯した過ちをも御寛恕下さりますように
なにせわが手にあまることばかり

そして、「よいかな。こんな（初歩的なことを）聞くのではないぞ。つまり、アビシニア人（al-ḥabasha）とスラブ人（al-ṣaḡāliba）は住む所は異なり、体質（ṭibā'）は正反対。なのに、何ゆえに共に暖かくて乾燥した物を食べ、同じような酒を飲み、ムスクとサフランの香料を振りかけているのか、ということだ。（というの）当然のことながら、あのように両者はまるっきり違った生活をしており。こんなことを聞いているのではないぞ。なぜなら、アビシニア人は薬を服用し、スラブ人は滋養を取っているからだ、とこんな答えを求めているのではないからだ。ちょうどそなたが夏と冬とは違った振舞いをするようになる⁶⁴。

また、豚（khijir）は動物の中では最も均整（a'dal）が取れており、草にやれば（施せば）優れた肥料となるのに、どうして豚は最も汚らしい人間の排泄物を食べるのか、とも聞いてはおらぬぞ。それというのも、このことに関しては、昔から様々に論じられており、物の本にも書かれているからじゃ⁶⁵。

またそなたにこうは聞いてはおらぬぞ、つまり、なぜ^{いにしえ}古の者たちは味によって粘液を区別せず、また、ガラス状の物質（al-zujāji）と無味な物（al-masikh）とを同一とし、また、なぜ粘液は寒性なのに、第3の消化時には血液よりも暖かいと言うのか、と。あるいはまた、分娩（wilāda）は自然の事象かどうかについて問うているのではないぞ。分娩は3種の病気が合体したものだ。分娩が自然事象でないならば、分娩は人間が自然に行う行動の基礎となっておるのじゃ。そうではなくて、わしが尋ねているのは、人は睡眠時には尿意を堪えておる。そして、たとえ、排尿している夢を見たとしても、実際にしているわけではない。しかし目覚めている時には尿意を我慢できずに、立ち上がって厠に駆け込むではないか。

「確かにその通り」、と答えた。「だが、交接の夢を見ると、我慢できない。そして、目が覚めると衣服の中に洩らしてしまっているのに気がつくことが多々あるな」。「仰せの通り」と私も一言。

「そこでじゃ、一体なにゆえに、尿意はその切迫さ加減や量の多さにもかかわらず、我慢できて、他方、精液の場合は、少量であるのに、どうして目覚めるまで我慢できぬのかな。尿も精液もともに同じ排泄物じゃろうに」⁶⁶。これに対して、「はてなんと存じません」と返した。

「尿について意見の無いものは、他人のデザートについて手を出して食べてしまうものだ」、と警告を発してから、一同を見渡し、「どうやら客人は、腹がくちくちくと頭が働くなる、ということをご存じないようだ」とのたまう。さらに、「ヒポクラテスがこの若者と同じ物を食べたなら、きっと知力の方は胃の方に回ってしまっていると思ったであろう」、と付け加えた。そして、「これ若者よ！ 医者というものは、数々の医学上の問題や医学の歴史、それにあの難解なヒポクラテスの書物を理解したうえでないと一人前にはなれぬぞ。その上に、『アレクサンドリア全書』の注解書⁶⁷、太陽と月が潮汐に及ぼす影響、さらに、成長に関して、それがあある器官の特性か、あるいは身体の一部かどうかを見分けなければならぬ。また、正常な脈拍と異常な脈拍を見分ける必要がある。そうでなければ、一体、何を身に付けるのじゃ。女装の役者

(mukhannath)⁶⁸⁾ や女誑したちの行状、イブン・シュライフ⁶⁹⁾ の良き性格、あるいはサイドの歌声、はたまた、吃驚するような奇跡譚、それに踊り子たちの官能的な震え声とダンサーのリズミカルな歌声。こんなものにうつつを抜かすというのかな？」と長口舌。

老師はさらに言葉を継いで、「そなたがもし、諸種の医学書や薬剤調合書に興味を持たないならば、一体全体何に関心があるのじゃ」といった。さらに、「恋人同士が首にかけける護符の解説書、それともそなたは、頬、体つき、額、眼、瞳、溜息、あるいは親しく付き合っていたものの別れ、悲しみにくれる者の悲嘆、再会の喜び、別離の嘆き、和合の甘美さ、別れの苦さ、かてて加えて、カイスとルブナー、マジヌーンとライラー、それにジャミールとブサイナ、これらにまつわる物語に興味を持っておるのかな？」と聞いてきた⁷⁰⁾。

私が、「実は内科医ではないのです」と白状すると、では一体そなたの本職は何かな、と尋ねたので、眼科医だと告げると、「それならアブー・アッユーブが専門じゃ」と告げた。

第5章「無知ゆえ答えられない眼科医の質問」

長老医はアブー・アッユーブに、「まずこの盃を干してから、この若者に質問をしてみなされ」と命じた。そこで、眼科医は盃を手に取りしげしげと眺めてから、「実にこの盃は、詩人の詠っている通りですな」と一言。

透き通る酒杯、氷で拵えしごと

葡萄酒はあたかも燃え盛る炎のごとし

「われらが師の眼科医、(アブー)・イスライールの歌を聞かせてくれ」に応じて、アブー・アッユーブはこんな詩を吟じた。

目が痛くて堪らぬとの訴えに

殺戮が過ぎたるがゆえ

刃先にこびるつく血こそ何よりの証拠

眺め続ければ自ずと眼も赤くなる

さらに声を潜めて、

何の理由もないが瞼の病

目の縁のコホルも役立たず

美人その下手さ加減を嘆くこと

頬に残るは困惑の跡

とひとしきり詠った。

一同は私一人を除いて大いに飲んでおったが、アブー・アッユーブがこう聞いてきた。「お

主の知らぬ間に、少し頭が弱い男がそなたの驢馬に薬を塗りつけて失明させ、さらに涙腺を閉塞させたでしょう。ところが、この男が切開治療を施し、視力を快復させると約束し目薬を塗布したら視力が回復した。この場合、そなたは目の層と涙腺を覆って視力を奪った薬と、たちどころにその病を治した薬をご存知かな」と聞くので、「存じません」と答えた。

そこへこの家の主が、「ただれ目の主よ、目の薄膜がどのような時に病気を起こし、また他の病気の原因となるのかと質問しておるのじゃ。さらに、なにゆえにガレノスは小さい目を眨しているのに、細い瞳孔は誉めておるのか、とも聞いておるのじゃ」。

「ああ、何たることぞ！一体、そなたは若き日々を何をして無駄に費してしまったのじゃ。おそらく、朝から晩まで酒を飲み、そなたと同種の仲間と付き合い、妓女（*qiyān*）に現^{うつ}を抜かしていたのであろう。酒の銘柄には詳しく、祭の準備は熱心に行い、お喋りに耽り、楽器をかき鳴らし、調弦をし、リズムに合わせてリュート（*al-ʿidān*）に強弱をつけ、莊重、軽快、次いでラマル調、それからハザジュ調、中指、人指指、薬指を使って様々な音程と音階の調律法に没頭しておったのか？⁷¹⁾のう、そこもと。医者がその知識を活用し患者を救わないとしたら、一体こんな無駄な知識が何の役に立つ？」。

「実は眼科医ではありませんぬで」と告白した。

そうすると老師は、「そなたは次々と専門を自称し、その度に否定しておる。まるで大皿を出しては別の皿を下げるようなものだぞ。さあ、そなたの本当の専門は何じゃ」と聞いてきた。そこで、外科医だと答えると、「それはアブー・サーリムの専門じゃ」と言った。

【参考文献】

- ‘Abbās Ḥasan (ed.), *Maqāmāt Ibn Nāqiyā*, Alexandria, al-Dār al-Andalusiyya, 1988.
- ‘Abū ‘Ubaid, *Kitāb al-Amthāl*, Damascus, Dār al-Māmūn, nd.
- Álvarez-Millán, Cristina, “Practice versus Theory : Tenth-century Case Histories from the Islamic Middle East,” *Social History of Medicine*, 13(2000).
- Bachmann, Peter, “Arzt und Krankheit in einigen Gedichten des arabischen Lyrikers al-Mutanabbī: Literar-und medizinhistorische Anmerkungen,” *Medizinhistorisches Journal*, 4(1969).
- Bosworth, Clifford E., *The Mediaeval Islamic Underworld: The Banū Sāsān in Arabic Society and Literature, Part One, The Banū Sāsān in Arabic Life and Lore*, Leiden, E. J. Brill, 1976.
- Bray, Julia Ashtiany, “Third and Fourth Century Bleeding Poetry,” *Arabic and Middle Eastern Literatures*, 2(1999).
- Browne, Edward G., *Arabian Medicine: The Fitzpatrick Lectures delivered at the Royal College of Physicians in November 1919 and November 1920*, Cambridge, The Cambridge University Press, 1962 (first ed. 1921).
- Bürgel, J. Ch., “*Adab* und *Iʿtidāl* in ar-Ruhāwīs *Adab at-Tabīb*: Studie zur Bedeutungsgeschichte zweier Begriffe,” *ZDMG*, 117(1967).
- , “Secular and Religious Features of Medieval Arabic Medicine,” in Ch. Leslie (ed.), *Asian Medical Systems: A Comparative Study*, Berkley, University of California Press, 1976.
- Diem, Werner von and Edzard, Lutz, “Ein unhöflicher Brief und liebliche Verse: Ein Genizadokument des 11.–12. Jahrhunderts n. Chr. aus der Heiderberger Papyrussammlung,” *ZDMG*, 161(2011).
- Dols, Michael, *Medieval Islamic Medicine: Ibn Ridwān’s Treatise ‘On the Prevention of Bodily Ills in Egypt’*,

- Berkeley, University of California Press, 1984.
- Elkhadem Hosam, *Le Taqwīm al-ṣiḥḥa (Tacuini Sanitatis) d'Ibn Buṭlān: un traité médical du XI^e siècle, Histoire du Texte, Édition Critique, Traduction, Commentaire*, Aedibus Peeters, Lovanii, 1990.
- Galēnos, *De placitis Hippocratis et Platonis*. (内山・木原 (訳)『ヒポクラテスとプラトンの学説』[西洋古典叢書・第三期第13巻]、京都大学学術出版会、2005年)。
- Gelder, Geert Jan van, *Of Dishes and Discourse: Classical Arabic Literary Representations of Food*, Surrey, Curzon, 2000.
- Geva-Kleinberger, A. and Lev, E., "Language Passivity in the Medical Arabic and Judaeo-Arabic Prescriptions of the Cairo Genizah," *Journal of Semitic Studies*, 54 (2009).
- al-Ghazālī, *Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn*, Damascus, Maktaba 'Abd al-Wakīl al-Durūbī, 1978.
- Goitein, S. D., *A Mediterranean Society, The Jewish Communities of the Arab World as Portrayed in the Documents of the Cairo Geniza, vol. II. The Community*, Berkeley/Los Angeles, University of California Press, 1971.
- Grand'Henry, Jacques, *Le Livre de la Méthode du Médecin de 'Alī Ridwān (998-1067) : texte arabe édité, traduit et commenté*, Louvain-La-Neuve, Institut Orientaliste de Louvain, 1979.
- Gutas, Dimitri, *Greek Thought, Arabic Culture: The Graeco-Arabic Translation Movement in Baghdad and Early 'Abbasid Society (2nd – 4th/8th – 10th centuries)*, London and New York, Routledge, 1998. (山本啓二訳『ギリシア思想とアラビア文化—初期アッバース朝の翻訳運動』、勁草書房、2002年)。
- al-Hamadhānī, Badī' al-Zamān, *Maqāmāt*, ed. Muḥammad 'Abduh, Bayrūt, Dār al-Mashriq, 1973.
- Hämeen-Anttila, Jaakko, *Maqama – A History of a Genre*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- al-Ḥāriri, *Maqāmāt*, ed. Īsā Sābā, Bayrūt, Dār Ṣādir, 1980. (堀内勝訳『マカーマート』、平凡社、2009年)。
- Hau, Friedrun, "Die Bildung des Arztes im islamischen Mittelalter," *Clio Medica*, 13 (1979).
- Hippocrates, *Ancient Medicine*, ed. and tr., W. H. S. Jones, (Loeb Classical Library), Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1923.
- , *The Oath*, ed. and tr., W. H. S. Jones, (Loeb Classical Library), Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1923.
- Ibn Abī Uṣaybi'a, *Kitāb 'Uyūn al-Anbā' fī Ṭabaqāt al-Aṭibbā'*, partially translated by Schacht and Meyerhof.
- Ibn Athradī, al-Arshadyāqī, "Kommentar zur Ibn Buṭlān's Da'wa al-Aṭibbā'," in Klein-Franke (1984).
- Ibn Buṭlān, *Risāla Da'wa al-'Atibbā' (The Physicians' Dinner Party)*, edited from Arabic Manuscripts with an Introduction, Felix Klein-Franke, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1985).
- Ibn al-Qiftī, *Ta'rīkh al-Hukamā'*, partially translated by Schacht and Meyerhof.
- Ibn Sīnā, *al-Qānūn fī al-Ṭibb*. (五十嵐一訳『科学の名著 8 – 医学典範』、朝日出版社、1981年)。
- , *al-Urjūza fī al-Ṭibb, Poème de la Médecine (Urgūza fī 'T-Ṭibb, Cantica Avicenne)*, textes arabe, traduction Française, traduction Latine du XIII^e siècle avec introductions, notes et index, établi par H. Jahier et A. Nouredine, Paris, Societe d'Édition (*Les Belles Lettres*), 1956. (志田訳信男『アヴィセンナ「医学の歌」』、草風館、1998年)。
- Isaacs, Haskell D., "Arabic Medical Literature," in M. J. L. Young, J. D. Latham, and R. B. Serjeant (eds.), *Religion, Learning and Science in the 'Abbasid Period: The Cambridge History of Arabic Literature*, Cambridge, 1990.
- Kindermann, Hans, *Über die Guten Sitten beim Essen und Trinken, das ist Das 11. Buch von al-Ghazzallī's Hauptwerk*, Leiden, E. J. Brill, 1964.
- Klein-Franke, Felix, *Vorlesungen über die Medizin im Islam*, Sudhoffs Archiv, Beiheft 23, Wiesbaden, F. Steiner, 1982.
- , *Ibn Buṭlān: Das Ärztebankett, aus arabischen Handschriften übersetzt und mit einer Einleitung sowie*

- Anmerkungen versehen*, Stuttgart, Hippokrates Verlag, 1984.
- Leiser, Gary, "Medical Education in Islamic Lands from the Seventh to the Fourteenth Century," *The Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, 38(1983).
- Levey, Martin, "Some Eleventh Century Medical Questions posed by Ibn Butlān," *Bulletin of the History of Medicine*, 39(1965).
- al-Ma'arrī, Abū al-'Alā', *Risālāt al-Ṣāhil wa al-Shāhij*, Cairo, Dār al-Ma'ārif, 1975.
- Malti-Douglas, Fedwa, *Structures of Avarice: The Bukhālā' in Medieval Arabic Literature*, Leiden, E. J. Brill, 1985.
- Mez, Adam, *The Renaissance of Islam*, tr., S. Kh. Bukhsh and D. S. Margoliouth, New York, AMS, 1975 (reprint of 1937 edition).
- Monroe, James T., *Risālāt at-Tawābi' wa z-Zawābi': The Treatise of Familiar Spirits and Demons by Abū 'Āmir ibn Shuhaid al-Ashja'ī, al-Andalusī – introduction, translation and notes*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1971.
- Nicholson, R.A., *A Literary History of the Arabs*, Cambridge, Cambridge University Press, 1977 (1st ed. 1907).
- Perho, Irmeli, *The Prophet's Medicine: A Creation of the Muslim Traditionalist Scholars*, (*Studia Orientalia*, ed. The Finnish Oriental Society), Helsinki, 1995.
- Prendergast, W. J. (tr.), *The Maqāmāt of Badī' al-Zamān al-Hamadhānī: translation with an introduction and notes historical and grammatical*, Surrey, Curzon, 1973 (first ed. 1915).
- Ricotti, Eugenia Salza Prina, *L'Arte del Convito nella Roma Antica*. (武谷なおみ訳『古代ローマの饗宴』、講談社、2011年)。
- Rosenthal, Franz, "The Defense of Medicine in the Medieval Muslim World," *Bulletin of the History of Medicine*, 43 (1969).
- , "The Physician in Medieval Muslim Society: The Fielding H. Garrison Lecture," *Bulletin of the History of Medicine*, 52(1978).
- Schacht, Joseph and Meyerhof, Max, *The Medico-Philosophical Controversy between Ibn Butlan of Baghdad and Ibn Ridwan of Cairo. A Contribution to the History of Greek Learning among the Arabs*, Cairo, The Egyptian University. The Faculty of Arts. Publication No. 13, 1937.
- Schipperges, Heinrich, *Arabische Medizin im lateinischen Mittelalter*, Heidelberg, Springer, 1976.
- Sezgin, Fuat, *Geschichte des arabischen Schrifttums, band III: Medizin – Pharmazie – Zoologie – Tierheilkunde, bis ca. 430 H.*, Leiden, E. J. Brill, 1970.
- Ullmann, Manfred, *Die Medizin im Islam*, Handbuch der Orientalistik, hsgb. von Bertold Spuler, Erste Abteilung, Ergänzungsband VI, I. Abschnitt, Leiden and Köln, E. J. Brill, 1970.
- , *Islamic Medicine – Islamic Survey* 11 (tr. J. Watt), Edinburgh, The Edinburgh University Press, 1978.
- Usāma ibn Munqidh, *Kitāb al-I'tibār* (Princeton Oriental Text, vol. 1), ed. S. Hitti, Princeton University Press, 1930. (藤本・池田・梅田訳注『ウサーマ・ブス・ムンキズ回想録』、関西大学東西学術研究所 訳注シリーズ 3、関西大学出版部、1987年)。
- Waines, David, *In a Caliph's Kitchen*, London, Riad El-Rayyes, 1989.
- , "Dietetics in Medieval Islamic Culture," *Medical History*, 43(1999).
- al-Zahrāwī, Abū al-Qāsim Khalaf b. 'Abbās, M. S. Spink and G. L. Lewis(eds.), *Albucasis – On Surgery and Instruments*, a definitive edition of the Arabic text with English translation and commentary, London, The Wellcome Institute of the History of Medicine, 1973.

五十嵐一『東方の医と知—イブン・スィーナー研究』、講談社、1989年。

岡崎桂二「『マカーマート』の言語遊戯」、『関西アラブ・イスラム研究』、1号（2001年）。

同「『マカーマート』の演劇性—メタモルフォシス・カタルシス・ダイクシス」『四天王寺国際仏教大学紀要』、39号（2005年）。

同「アラブ古典文学における詩霊（ジン、イブリース、シャイターン）の運命」『四天王寺国際仏教大学紀要』、41号（2006年）。

同「『マカーマート』における医療のトポス—蘇生術、産婆術、預言者の医術」『四天王寺大学紀要』、47号（2009年）。

同「アダブ考—アラブ文化におけるアンソロジーの思想」『四天王寺大学紀要』、51号（2011年）。

同「ムスリムの食卓作法—ガザーリー『宗教諸学の再興』『食卓作法の書』を中心に」『アラブ・イスラム研究』、10号（2012年）。

蔵持不三也『シャルラタン—歴史と諸譚の仕掛人たち』、新評論、2003年。

苗村卓哉「15—16世紀ダマスカスにおけるウラマーの学習過程—イブン・トゥールーンの事例を中心に」、

山本正身（編）『アジアにおける「知の伝達」の伝統と系譜』、慶應義塾大学言語文化研究所、2012年。

福岡伸一『動的平衡』、木楽社、2009年。

堀内勝（訳）『マカーマート—中世アラブの語り物』、平凡社、2009年。

前嶋信次『アラビアの医術』、中央公論社、1965年。

宮本久雄『他者の風来—ルーアッハ・ブネウマ・気をめぐる思索』、日本キリスト教団出版局、2012年。

[文献略称]

EAL *Encyclopedia of Arabic Literature*

EI *The Encyclopaedia of Islam*, 2nd. ed.

EQ *Encyclopaedia of the Qur'an*

[注 記]

- 1) 『宴会』の写本状況はKlein-Franke(1985), pp. 6-16, 参照。刊本の評価については前掲書、9頁—10頁参照。マイヤーファークリンについては、EI., qv. Mayyāfārīkīn (V. Minorsky, C. Hillenbrand), 参照。
- 2) 『宴会』は冒頭で、「本書は『カリラとディムナ』の形式 (madhhab) に倣い、真面目 (jidd) と虚偽 (bāṭil) で笑いを誘う」とその執筆動機を明らかにしている。Klein-Franke (1985), p. 3 (アラビア語の部)。この表現は「真面目 (jidd) と不真面目 (hazl)」と同様の発言で、ジャーヒズを濫觴とするアラブ散文学の一形式を指し、読者 (= 聞き手) の興味を引くために、物事の二面性を論じたり、行文中に真面目な話と冗談めく話を混交させる技法を意味する。岡崎 (2011年)、22頁、注 (45)、参照。また『宴会』にはマカーマートの語が使われているが、ハマザーニーのテキストを指すものではない。Klein-Franke(1985), p. 49, p. 66 (アラビア語の部)。マカーマート成立史に関してはHämeen-Anttilaがこれまでの議論を整理し、その中に『宴会』を位置付けている。Cf., Hämeen-Anttila, pp. 64-98, pp. 126-132. Cf., Klein-Franke(1984), pp. 34-37.
- 3) 後述のようにイスラーム世界で広く行われ、ギリシャ医学を祖述する学問の呼称をいかにするかは、各研究者を悩まし、その命名は自己の立場の指標となっている。このイスラーム世界での医学の担い手はイブン・ブトゥラーンのように、必ずしもムスリムではなく、また、イブン・スィーナーのごとくアラブ人ではない。本稿ではその医学文献の多くがアラビア語で著された事実鑑み、アラビア医学の語を採用する。Cf., Browne, p. 5; Ullmann(1970), p. 12; ditto(1978), p. xi. またクライン=フランケはこの煩を避けて「イスラーム (における) 医学 (Die Medizin im Islam)」の表題を付ける。Klein-

- Franke(1982), p. 3.
- 4) トゥハイリーに関してはBosworth, pp. 21-34; Gelder, p. 11, 参照。ハリリーとは異なって、ハマザーニーの『マカーマート』の逸話(マカーマ)は食をテーマにしたものが多く、一般庶民の生態が詳述されている。特に食い逃げ(第12話)や、食べ物の名称を列挙して「これをどう思う」と相手に期待をもたせた挙句に裏切る逸話(第34話)に迫真性がある。またトゥハイリーやジャーヒズの著作名としても使われている「吝嗇者(bakhīl)」に関してはGelder, p. 47; Malti-Douglas, pp. 138-156, 参照。
 - 5) マディーラのトポスに関しては岡崎(2001年), pp. 26-27; Hämeen-Anttila, pp. 106-114; Malti-Douglas, pp. 45-49; Gelder, pp. 52-53。
 - 6) 医学、文学、社会の相関関係を扱った論文に、「瀉血(faṣḍ)」をテーマとする詩を分析したブレイのものがある。Bray, pp. 74-75, p. 83, p. 88. また同様の問題意識に基づくのが、ムタナッビーの詩集から医学関係のテーマを選び出したバツハマン論文である。Cf., Bachmann, p. 99. さらに医学の重要性、包括性は「学問には宗教(adyān)に関わる法学と身体(abdān)に関する医学の2種類('ilmān)ある」の言が示すところである。Cf., Bürgel(1976), p. 56; Isaacs, p. 342; Klein-Franke(1982), p. 1.
 - 7) イブン・ブトゥラーンの伝記的事実の簡略な説明は、Ullmann(1970), pp. 157-158; *EL*, qv. Ibn Buṭlān (J. Schacht); *EAL*, qv. Ibn Buṭlān (Klein-Franke)、参照。より詳しくは、Klein-Franke(1984), pp. 9-24; Schacht and Meyerhof, pp. 14-19, 参照。これらの研究書の情報の多くはIbn Abi Usaibi'aとIbn al-Qifīの大部な『医学者伝』に基づくが、イブン・ブトゥラーンに関する事項はSchacht and Meyerhofが訳出しており(pp. 51-66)、本稿はその英訳による。
 - 8) カリフ、アル＝ムスタンシルはユダヤ人やキリスト教徒の医師を重用していたことで知られている。Goitein, pp. 243-246; Klein-Franke(1984), p. 13; Schacht and Meyerhof, p. 11. またカイロの「ゲニザ文書」の研究者達は、カイロのユダヤ人医師達の広汎なネットワークを指摘している。Cf., Goitein, pp. 240-261; Geva-Kleinberger and Lev.
 - 9) このアリストテレス以来の難問は、誕生後すぐに餌を啄ばむ雛鳥に比して、他の鳥の雛は親鳥に給餌してもらう必要があり、そこから「行動の敏捷な生物ほど体温が高い」という命題の正否が争われた。両者の論争の経過、内容は双方の著した「書簡(risāla)」を纏めて英訳したSchacht and Meyerhof, pp. 70-118(English translation); pp. 34-84(Arabic texts), 参照。Cf., Klein-Franke(1984), pp. 14-15.
 - 10) 8世紀における紙の移入とともに盛んになった書籍の刊行は、アラブ・イスラーム世界で学問のあり方に根本的な変化をもたらしたと考えられている。従来、どの学問分野においても、その修得には学を究めた先師につき、その講筵に連なり、免許状(ijāza)を取得する必要があったが、書籍の出版により独学の道が開かれたのである。Cf., *EL*, qv. idjāza(G. Vajda). これはちょうど、詩の伝承において口承から書承へと変化したのと軌を一にする現象である。ジャーヒリーヤ期より、詩の宣布、伝承は詩人につき従う専属の口承家(rāwī)が行ってきたが、イブン・クタイバ『詩と詩人の書』やアブー・タンマーム『ハマーサ詩集』等のアンソロジーが出るに及んで、ラーウィーは口承家としての役割を終えた。イスラーム世界における学問の口承から書承への移行は、岡崎(2011年)、24頁、注(76)、参照。医師の養成、医学教育の変遷は、Goitein, pp. 246-256, HauとLeiser論文参照。なお中世イスラーム世界の学者の学習過程の実際は、時代は下がるがイブン・トゥールーン(1475年生まれ)の研究書に詳しい。彼は一人前の学者となる前に、各地の専門家の門を叩き、その講義を聞いて免許状を付与されている。苗村論文参照。またイブン・リドワーンの伝記的事実は、Grand'Henry, pp. 1-7; Ullmann(1970), pp. 158-159; *EL*, qv. Ibn Ridwān (J. Schacht), 参照。
 - 11) Klein-Franke(1984), p. 23.
 - 12) *Ibid.*, pp. 33-34.
 - 13) Usāma(池田監訳)、243頁～246頁。訳書では「イブン・バトゥラーンの医術における奇蹟」との小題が

付されている。

- 14) 当該書の資料的価値は訳者の一人である梅田の解題に詳しい。前掲書、3頁～7頁。
- 15) 「彼ら（フランク人）の医術の奇妙さ」の小題が付されている。前掲書、175頁～178頁。当該箇所は Browne (pp. 69-72) や前嶋 (117頁～121頁) も取り上げている。
- 16) アラビア医学史研究の基本文献は、Isaacs; Klein-Franke(1982); Ullmann(1970); ditto(1978)、がある。その中で、アイザークスは『ケムブリッジ・アラブ文学史』中の論文であり、一般読者を対象に簡潔に纏められており、同様に、ウルマン (1978) は広い読者層を対象とするIslamic Surveyシリーズ中の一書であり、アラビア医学史を多方面に亘り取り扱い基本書と評価できるであろう。但し、著者も明記するように、外科、病院、医師と患者の関係、医学教育、等は対象とされないが、ヘレニズム化の過程が特に詳述されている。他方、Ullmann(1970) はドイツ語という制約があるが、より詳細に問題を扱っており、特に第3部以降のアラビア医学の特徴であり、問題点でもある医学と哲学、神学との関係を取り上げて詳述する。より簡潔には「イスラーム百科事典」第2版中のṬibb(E. Savage-Smith)の項参照。他方、書誌に関してはSezginとUllmann(1970) が定評があり、前者は惜しむらくは1040年までしか対象としておらず、他方、後者はより多数の医師を取り上げ、伝記情報をも記す。またBrowneの講義録は今なお価値を有し、興味深い話題を取り上げてこの分野への興味を掻き立てる。日本語文献では前嶋本が、多くをブラウンに依拠しながらも、著者独自の視点からアラビア医学を纏め直して読み応えがある本となっている。また五十嵐のイブン・スィナーの解説はそのままアラビア医学史の概説となって必須文献である。五十嵐 (1975), 27頁～65頁。
- 17) アラビア医学の西洋キリスト教世界への移入については、Schipperges; Diem; Ullmann(1978), pp. 52-54, 参照。専著としてはSchippergesがあり、第1章 受容 (11世紀～12世)、第2章 同化 (12世紀～13世紀)、第3章 統合 (13世紀～14世紀)、と時代毎にその移入過程、変遷を論じている。また中世ヨーロッパにおける医学の基礎をなすガレノスの果たした役割と意義に関する簡潔な説明は、ガレノスの「月報」(二宮)の解説参照。Cf., Klein-Franke (1982), pp. 72-77.
- 18) 本注 (3) 参照。
- 19) Bürgel(1976), pp. 44-54. ギリシャ語文献のアラビア語への翻訳過程に関しては、Gutas (山本訳) 参照。特に医学文献に関しては、Klein-Franke(1982), pp. 68-84; Ullmann(1978), pp. 8-40, 参照。
- 20) いわゆる「預言者の医術」に関してはPerho参照。
- 21) Ullmann(1970), p. 51.
- 22) Rosenthal(1969); Ullmann(1970), p. 92, p. 95; Klein-Franke(1982), p. 104; *Et.*, qv. tashriḥ(E. Savage-Smith); *EQ.*, qv. Medicine and the Qur'ān(Irmeli Perho).『宴会』においても、長老医師は「医師は神と患者の仲介者 (mutawwasit)」と発言する。Klein-Franke(1985), p.22 (アラビア語の部)。アラビア医学における解剖の知見、意義は、Klein-Franke(1982), pp. 104-108, p. 111, fn. 8; Ullmann(1978), pp. 70-71.
- 23) Isaacs, p. 358; Ullmann (1978), p.50 : 五十嵐 (1981), p. 32.
- 24) 『養生表』はエルカデムによる校訂、仏訳、解説、を併載した本があり、当該書の東洋、西洋における意義、影響にまで解説は及ぶ (37頁～50頁)。Elkhadem; Ullmann(1970), p. 99; Isaacs, p. 348; Schipperges, pp. 134-144.
- 25) 医師はḥakīm (賢者の意) や, ṭabīb, mutaṭabbibと呼ばれたが、中世イスラーム世界における医者イメージは、Rosenthal (1978) 論文を、また、一般大衆と医療の関係は、Alvarez; Ullmann(1970), p. 49, p. 107; ditto(1978), pp. 56-63; Klein-Franke(1982), pp. 53-65, p.94; ditto(1984), pp. 27-34, 参照。医療行為には縁遠い庶民の間には偽医者が跋扈する下地があった。ハマザーニーは死者を生き返らせる口実で食にありつく人物 (第21話) を描き、ハリーリーは難産を救おうとする偽医者 (第39話) や偽瀉血師 (第47話) を各『マカーマート』で描いている。『宴会』は偽医者が蔓延るこのような社会情勢を背景

にした作品である。

- 26) イブン・ブトゥラーンの著作物に関しては、Klein-Franke(1984), pp. 24-27; Elkhadem, pp. 11-13. Schacht and Meyerhof, pp. 18-19.
- 27) 内容の紹介と抄訳はMez, pp. 156-169.
- 28) アダブの語義変遷やアダブ作品の特徴については岡崎（2011年）参照。
- 29) 岡崎（2011年）、10頁～12頁、参照。
- 30) *EAL.*, qv. risāla (J. Gelder); *EI*, qv. risāla (A. Arazi and H. Ben-Shammy).
- 31) *EAL.*, qv. Ibn Nāqiyā (R. Drory); Hämeen-Anttila, pp. 133-140.
- 32) *EAL.*, qv. Ibn Shuhayd (L. Alvarez); Hämeen-Anttila, pp. 219-229. 岡崎（2006年）、234頁～235頁。
- 33) *EAL.*, qv. Abū 'Alā' al-Ma'arri (G. J. H. Van Gelder); Monroe, pp. 7-12.
- 34) マカーマート・ジャンルと動物寓意譚の関係は、Hämeen-Anttila, pp. 89-96, 参照。
- 35) *Ibid.*, pp. 127-132.
- 36) 写本の解説は、Klein-Franke(1985), pp. 7-16.
- 37) 岡崎（2009年）はアラブ散文史において、医療のテーマがどのように変化してきたのか、つまり、事実観察である症例報告からフィクショナル化の過程を探ったもの。そこではハマザーニーとハリリーの『マカーマート』における医療のテーマが扱われている。
- 38) 古典ローマ期の「宴会文学」はRicotti（武谷訳）参照。
- 39) アラブ古典文学における「食文学」はGelder参照。その第4章（39頁～79頁）で「アダブと宴会」を扱っている。Cf., Klein-Franke(1984), pp. 43-44; p. 216, fn.
- 40) クライン＝フランケは1985年本において前年に出版した独訳の綿密な補訂を行っている。Klein-Franke(1985), pp. 15-16.
- 41) ムスリムの遵守すべき食事作法に関しては「ハディース集」の「食事の項」や、ガザーリー『宗教諸学の再興』『食卓作法の書』が参考になる。後者によれば、飲食に際しては礼拝と同様の清潔さで臨むべきだとして、先ず手洗いから始めるべきだとする。そして酢 (khal) で食べ始めるのが望ましいとする。Ghazālī, p. 111. またパン (khubz) はアラブ人の基本食であり、ガザーリーはパンに敬意を払うことを求めている。Ghazālī, p. 111. Cf., *EI.*, qv. Khubz (Pellat). 岡崎（2012）、59頁、注43、参照。さらに「酢も酒 (khamr) もない」との格言があり、編者はこれに注して、「よき物が何もない」意だとする。Abū 'Ubaid, p. 306, no. 999.
- 42) 歓待はジャーヒリーヤ期の遊牧アラブのエトスの核をなし、イスラーム勃興後はハディースに則り宗教的義務の一つとされ、現在でもイスラーム世界での行動指針の一つとして遵守されている。岡崎（2012年）、54頁、注（23）、参照。
- 43) パンに敬意を表すべきことは、前掲書、59頁、注（43）、参照。
- 44) 現在においても広くアラブ・イスラーム世界では、男性客の接待にその家の女性、特に妻、が当たることは稀であり、妻を話題にすることもない。したがって、この長老医師の妻への言及はマナー違反であり、そこに作者の意図があると考えられる。つまり、ハマザーニー『マカーマート』『マディーラのマカーマ』と同様、冒頭で招待者がアラブ・イスラームの倫理に則らず、また尋常の思考の持ち主でないことを明示して、この物語が架空のものであり、医者を揶揄する滑稽譚であることを読者に知らせているのである。岡崎（2011）、19頁、25頁参照。
- 45) ペルシャ語起源のハランジュに関してはクライン＝フランケの注参照。Klein-Franke(1984), p. 216, fn.
- 46) イブン・スィナーを初め多くの医者がチシャの効用に言及する。Klein-Franke(1984), p. 217, fn.
- 47) ムスリムにとって行為に先立ち意図表明することが重要とされているが、これは「行為はその意図と考慮によってのみ評価され、人それぞれにはその意図が問題である」というハディース（ブハーリー

- 《牧野訳》『サヒーフ』、49頁)に基づく。岡崎 (2012年)、64頁、注 (60)、参照。
- 48) これは数学者のピタゴラスではなく、5世紀に活躍した医師をさす。Cf., Ullmann (1970), p. 82. ギリシャ語医学文献のアラビア語化に関しては、Ullmann (1978), pp. 8-15, が簡潔にまとめている。また「平衡」はイスラームの行動指針の根底をなし、極端に走らず中庸を保つ事が重要視され、治療や健康維持においては、体液の平衡を保つことを目指した。Cf., Bürgel (1967), pp. 97-101. 岡崎 (2012年)、68頁、注 75、参照。この平衡に関しては五十嵐の説明が詳細かつ明解であるが、既に「動的平衡」の術語を用いているのが注目される。五十嵐、69頁～74頁、福岡、228頁～235頁、参照。
- 49) 『新約聖書』「マタイ伝」4章4節。Cf., Klein-Franke (1984), p. 220.
- 50) *Ibid.*, p. 221.
- 51) *Ibid.*, p. 221.
- 52) ガザリーもこの言を引いており、広く人口に膾炙していたと考えられる。岡崎 (2012年)、58頁、注 (42)、でこの表現の広がり扱っている。
- 53) マディーラは牛肉を乳で煮込んだ料理で天下の珍味とされ、ハマザーニーの『マカーマート』「マディーラのマカーマ」の主題となっているのを筆頭に、多くの作品で取り上げられており、アダブ書のトボスとなっている。本注 (5)、参照。また、その復元料理とレシピは、Waines (1989), pp. 54-55, 参照。Cf., Prendergast, p. 88, fn. 2.
- 54) Jibril b. al-Bakhtīshū'は、ジュンディシャープールで名声を博したバフティーシューウ家に属し、バグダードでアッバース朝第10代カリフ、マームーンの懇請を受けて長年侍医を務めた。Cf., Klein-Franke (1982), pp. 40-43; ditto (1984), p. 222, fn.; Bürgel (1976), p. 48.
- 55) ガザリーは「食後に甘いもの (デザート) と冷水が供されると良きものが完璧にそろう」というハディースを引く。岡崎 (2012年)、65頁参照。なお、『宴会』のこの医師の発言は、カリフ、マームーンの死因が冷水とともに嚥を食したとされていることへの言及。Cf., Klein-Franke (1984), p. 222, fn.
- 56) 厳格なムスリムは、神に全幅の信頼 (tawakkul) を置き、病による痛苦を神から与えられた試練だと解釈すべきであり、治療行為を神の意志への介入だとして拒絶したりした。また、医師の中に自己の立場を神と患者の仲介者と捉える者がいた。EQ, qv. Medicine and the Qur'an (I. Perho); Bürgel (1976), pp. 55-56; Klein-Franke (1982), pp. 109-132; ditto (1984), pp. 222-223, fn.
- 57) アラブ・イスラーム世界で用いられている医療器具は図解入りの、al-Zahrāwī (Albucasis), 参照。Cf., Klein-Franke (1984), pp. 223-224. 残念ながらこの個所の名称が指す多くの病名やその器具の同定は不完全である。
- 58) ムスリムは食後、水その他を用いて手洗いをする習慣があるが、ガザリー『再興』においてもアルカリを用いる方法が推奨されている。岡崎 (2012年)、60頁、注50。
- 59) この人物に関しては、Klein-Franke (1984), p. 225, fn., 参照。
- 60) トゥハイリー (押しかけ食客) については、本注 (4) 参照。
- 61) 10世紀頃にイスラーム世界にサーサーン朝の後裔と称する一団が現れ、徒党を組んで諸種の悪事を働いた。ハマザーニー (第19話)、ハリーリー (第49話) の「マカーマ」はそれぞれこの集団を活写している。またボスワースはこの一団の隠語に満ちた職業歌を校訂、英訳している。Bosworth. 『マカーマート』におけるバヌー・サーサーンの意義は、Prendergast, pp. 81-82, fn 7.
- 62) Cf., Klein-Franke (1984), p. 227, fn. イスラームの戒律の一つに飲酒を避けることがあるが、豚肉の忌避に比して、酒には医学的効用があり、その禁止は不徹底である。酒の総称はハムル (khamr) だが、ナツメヤシから作られた酒はここで用いられているナビーズ (nabīdh) と呼ばれ、このナビーズを含めて禁止されている飲み物が何を指すかの議論がある。岡崎 (2012年)、52頁、注13、参照。
- 63) 簡潔で押韻し人口に膾炙した表現であり、対偶表現 (ṭibāq) と語根転換 (jinās) というアラビア語

文レトリックで重視される技法が使われている。出典はアラブ世界随一の詩人と見なされているイムルウ・アルカイスの故事に倣う。Cf., Nicholson, p. 88.

- 64) それぞれスラブ人、アビシニア人（エチオピア人）を指すが、白人奴隷、黒人奴隷としてイスラーム世界に移入された。この問いはイブン・ブトゥランとイブン・リドワーンの論争で取り上げられた問題であり、Schacht and Meyerhof, p. 60（アラビア語）、p. 95（英訳）、参照。
- 65) 同上、第2問。Cf., Klein-Franke(1984), p. 232, fn.
- 66) 精液と尿の弁別は「礼拝への清め（wuḍū'）」との関係でイスラームでは重要事項である。Cf. Klein-Franke(1984), pp. 232-234, fn.
- 67) ガレノスの諸著作を纏めたとされる「アレクサンドリア全書」に関しては、Klein-Franke(1982), pp. 75-77, 参照。また、アラビア医学におけるガレノスの意義、役割は、Klein-Franke(1982), pp. 72-84; Ullmann(1978), pp. 31-34, 参照。
- 68) Cf., Klein-Franke(1984), pp. 234-235, fn. ムハッナス（mukhannas）とはアッバース朝初期に出現した女装の演技者で、Sh. Morehはこれをもって「アラブ世界に演劇無し」との従来の定説を覆した。岡崎(2005)、121頁、注1。
- 69) Cf., Klein-Franke(1984), pp. 235-236, fn.
- 70) 何れもアラブ文化、文学において伝説的に取り上げられる悲劇的な恋愛の主人公名。特に「ジンに取り憑かれた者」の意味を持つマジュヌーン（majnūn）の名は広く知られている。
- 71) アラビア医学では心理学的療法や、音楽療法が広く取り入れられているが、この個所は長老医師が音楽に知悉していることを背景にしている。Cf., Browne, pp. 81-91; Klein-Franke(1984), pp. 229-230, fn. 前嶋、85頁参照。